

竹本駒之助  
女流義太夫一代記

〔チラシ使用写真〕 竹本駒之助八十歳 文化庁芸術祭大賞授賞式にて

とうとう十回目となりました。これまで語らせていただいて、皆さまに感謝の思いでいっぱいです。これまでの公演はひとつひとつすべて記憶に残っています。あまり馴染みのない出し物もやらせていただいて、勉強させていたいです。こんなもつたないような立派な舞台も作っていたら、本当にありがたかったです。聴いてくださる方々の熱意、そしてスタッフの方たちが、少しでも良い舞台にしようと思つてやってくださっているのがよくわかつて、本当に皆さまのお気持ちに感謝しています。

五年前に始めた時は、体の不安もなく、大丈夫と思つていましたが、昨年二回手術したのがたつたつて、今回は本当に大丈夫かしら？という気持ちになっています。いい時に始めていただいたのですが、つくづくあと二、三年早ければよかつたかなあと。自分の管理が悪いのがいけないのですが。

それに加えて、今回の「すしや」はこれまで一番長いのです。竹本越路太夫師匠でも半

分かちかおやりになっていませんから。CD全集に入れたときは若かつたですから、長いなと思つても頑張れたのですが、今は……。一度に一段語りきれるか少し不安です。

「すしや」は、豊竹若太夫師匠と越路太夫師匠からお稽古していただきました。今回は普段はやらない部分が三箇所ほど入りますから、さらに長くなり、私にとつても初めての「すしや」になります。最後までつとめさせていいただいて本当に良かったと思えるように、語らせていただきたいと思ひます。

昨秋、文化功労者に選出していただいてから、これまで以上に忙しくなりました。疲れがたまることもあります。お稽古は休まず続けています。いまは、弟子の稽古のほかに、お素人さんのお稽古を隔週で週二回しています。お子さんから八〇代までいらつしやう、なかには、三十年以上続けていらつしやうの方や、一家三代でお稽古されている方もあります。長く続けている方は、気持ちが義太夫になつているんですね。すばらしいなと思ひます。お素人さんにはあまり厳しくできませんが、ちやらんぼらんな義太夫になつてほしくありませんから、決まりごとは、きちんとお教えしたいと思ひます。一所懸命覚えようと、熱心な方が多くいらつしやいます。昔は審査会があつて、文楽の御師匠様方がみえて審査をしてくださいました。家で審査会に出て、子どもが親よりいい番付になつたりすると、家中で採めた、なんていう話も聞きましたね。いまは、素義会が年に二度開かれています。

義太夫つて不思議なもので、一声出せるようになる、義太夫の菌がついちゃつて、やめられなくなるんですよ。中毒ですね。

お素人さんといえば、昔は、一生に一曲しかかならない方がたくさんいらつしやつたものです。師匠の持ち味のものを一生それだけなさる。そうすると、だんだんその人の良さが出てきて、御師匠様方も「あの人があの出し物をやるんなら、聞かせてもらおう」と、聴きに行かれたりしていました。私もたくさん聴かせていただきました。お客さんも耳が肥えていて、こわかつたですね。

私が義太夫を始めた頃は、戦後文楽が復興して、名人の方がまだたくさん残つていらしたんです。その舞台を聴かせていただいて、そのときはまだわからなかつたのですが、今でも不思議と耳に残つている。身についているんですね。

若太夫師匠にお稽古していただいていたとき、私はまだ子どもでしたが、師匠は「いまはわからないかもしれないけれど、よく聴いて耳に残しておきなさい」とおつしやつて、一段全部を聴かせてくださいました。K A A Tでこれまで語らせていただいた「和台合戦女舞鶴」や「仮名手本忠臣蔵九段目」などの大きな演目も、本番で何度も聴かせていただきました。ですから、その後、別の方の聴かせていただいても、「師匠はああいう言い方はしてはらんかったな」と気づきました。

舞台は戦場ですから。気が違います。いくらお稽古を聴いていても、本番でなくては言

えないこともありますから、舞台を聴いていないければわかりません。聴いておくことが大切なんです。

KAATのシリーズはここでいったん終止符を打ちますが、これまで色々な御師匠様方からお稽古をさせていただいたものを、一段すべてでなくとも、語らせていただける機会があれば良いなと思います。

けれど年ですから、体がもつかどうかですね。越路太夫師匠が「恥をかくのは自分もちやからな」とよくおっしゃっていたのを思い出します。ちよつと無理と思ったら、いけるかなと思っても、きちつとお断りしなさい、と。これまでそういうことはあまりなかったですけど、これからは、体と相談しながらやっていかないとけないなと思います。

これまでも義太夫一筋でしたし、これからも……義太夫以外にしてみたいことは特にないですね。子どもの頃はいつやめよう、いつやめようと思っていましたけれど、これが自分の道と決めたからは、他のことを考えたことはないです。天職と思っています。すばらしいものに出会えます。

昔、竹本朝重さんがインタビューに答えて「義太夫に出会えたことは、一生の宝です」とおっしゃって、それを聞いて「えー、そんなもんかいな」と思っていたのですが、越路太夫師匠と出会ってから、自分もそうだとつくづく思います。本当にすごいお方でした。

子どもの頃は義太夫が好きになれなかった私ですが、越路太夫師匠のお稽古で目を開かされました。越路太夫師匠がすばらしいのは新鮮さ、です。ご自分では古風がお好きとおっしゃるのですが、三百年前のものをやっているながら、とても新鮮なのです。現代調にやっている、というのではないのですよ。鮮度がすばらしいのです。師匠の語りのように、新鮮に聴いていただけるようになりたい。それが私の望みです。まだ欲が残っているんですね。

越路太夫師匠に出会えたのは若太夫師匠のおかげですから、若太夫師匠は、私の一生を決めてくれた人、線路を敷いてくれたお師匠さんだったなと、つくづく思います。

本当にご縁というものは、人の一生を決める、すごいものですね。

KAATとのご縁も本当にありがたかったです。終わってしまうのが、なんだかさびしいです。シリーズは一度終わりになりますが、KAATで出会ったお客様とのご縁が途切れることのないよう、どのようなかたちになるかわかりませんが、できるかぎりなにか続けさせていただけます。そういう望みは持っていたいなと思っております。

皆さま、本当にありがとうございました。

聞き書き 荒井恵理子



【写真】二十三年 竹本駒之助KAAT初お目見得公演  
『和田合戦女舞鶴』三段目ノ切「市若丸初陣の段」より



【写真】二〇一八年二月公演のチラシ